D 149  振袖に対する女子短大生及び母親の意識
昭和学院短大 ○伊藤 千恵 高野倉 瞳子 長野 トモ子
共立女大家政 小林 茂雄

＜目的＞日常生活において和服の着用機会は減少し、特に若年層の間ではこの傾向が顕著に現れている。しかし、振袖には依然として強い関心が示され、成人式ではかなり多く着用されていることも事実である。そこで成人式を迎えた女子短大生とその母親を対象に、振袖に対する意識を調査し、比較、検討した。また振袖の着用の実態についても調査した。

＜調査方法＞本学女子短大生とその母親を対象に1990年12月から1991年1月にかけて、アンケート調査を行った。調査内容として、振袖に対する意識は、実用性、伝統美、ファッション性等に関する36項目であり、また振袖の着用の実態については、購入状況、購入時期、成人式においての着用状況、着付け時間帯に関する29項目とした。調査データは、単純集計、平均評定の分析値、因子分析による基本因子の抽出、及び平均因子得点による基本因子の女子短大生と母親間の特徴の分析をした。

＜結果＞女子短大生及び母親とも、振袖には歩きやすさや伝統的な美しさを感じているが、値段が高く、動きにくい事も感じていた。母親は規範性を重視する傾向があるが、女子短大生は、規範性にはあまりこだわらず着用機会が多いことを望んでいた。また因子分析（固有値1.0以上、パリマックス回転）により女子短大生は12個の基本的因子、母親は11個の基本的因子が抽出された。これらの因子は女子短大生では、着用性、ファッション性、伝統美等であり、母親では、シンボル性、実用性、伝統美等であった。

D 150  小・中・高の通学服に関する一考察
松阪女短大 ○渡辺 洋子 川本 果子

目的 我々日本人の衣服に対する考え方は、幼少時から徐々に確立してきものであると考えるとき、現在の子供達の生活のありようが、彼らの将来の衣服選択形成に重要な役割を果たしているであろうことは容易に推察される。本報では主に通学段階にある子供達の生活のありようの部を占める通学服について、その現状を把握するとともに、その中に含まれる問題点を明確にすることをねらいとする。

方法 ①小、中、高における通学服の現状 ②学校教育における生活教育の現状 ③短期大学女子学生の衣生活以上の3点について、アンケート調査、基礎文献、制服関連業界誌、学校教育カリキュラム等の諸資料をもとに考察した。

結果 小学校の通学服としては都市部では自由服が多くみられるが、郡部、町村部においては制服、または体育用トレーニングウェア上下がかなり多く採用されている。中学校では規定の制服が多いが、一部部下校にもトレーニングウェアを採用しているところがみられる。高等学校においては、最近制服のモデルチェンジ傾向がみられ、D Cブランド制服の採用による入学生へのアピールも試みられている。しかし、学校教育の中で通学服に対する教育内容はほとんどみられない。短大女子学生の衣生活にみられる問題点として、服装に対する興味、関心の異常な高さと、経済的負担の大きさがあげられる。また、服について何も考えなくてよいという点で、制服に対する回避傾向もみられる。このような現象は子供の通学段階に適応した衣服観が形成されていないことを示唆している。